

なぜ、日本人は、『敗者』に、優しいのか - W杯から感じたこと -

W杯の準決勝で、ブラジルは1-7でドイツに敗れました。試合が終わった直後のブラジルの監督の言葉が印象的でした。「許して欲しい」と言ったのです。ブラジル国民からの強烈な批判に対する言葉だと思いました。勝負に敗れた者に対する非情な処罰に対するエクスキューズです。

日本人は、こんなことは言いません。日本人選手も言いません。「本来の力を出せなかった」というのが、多くの選手の言葉です。サッカー解説者も同じです。「もっと力があつたはずだつた」と言います。

成田空港では、多くの日本人が、「よく頑張つた」と、笑顔で選手を出迎えます。イタリアでは、「迎えるファン皆無」。イングランドでは、「出迎えファンはおばあさんひとり」だというのに。

なぜ、こんなに違うのか。今は答えることができます。

それは『崇り』を恐れた日本人の歴史から来ているものだと思います。井沢元彦さんの本「学校では教えてくれない日本史の授業」にその理由が書かれています。

昔、日本人は、人災であれ天災であれ、悪いことは怨霊の仕業だと考えていました。

- ・ 聖武天皇が遷都を繰り返したのも（長屋王の怨霊）
- ・ 桓武天皇が平安京に遷都したのも（やはり、長屋王の怨霊）
- ・ 大宰府天満宮が作られたのも（菅原道真の怨霊）
- ・ 源氏物語が作られたのも（藤原氏に権力闘争で敗れた平安時代の源氏の怨霊）
- ・ 古今和歌集の六歌仙が選ばれたのも（藤原氏に敗れた平安時代の貴族の怨霊）
- ・ 平家物語が琵琶法師によって語り継がれたのも（平家の怨霊）

これらは、すべて『怨霊の仕業』で説明することができると井沢さんは言います。

遷都は、『怨霊からの逃避』ですし、平安時代の貴族は、『怨霊の仕業』を『鎮魂』という形で、「崇り」を回避しようと考えました。大宰府天満宮の建設しかり、源氏物語の執筆しかり、六歌仙の選出しかり。

もともと日本人は、みんな仲良くという『和の精神』を尊び、争いごとは避ける傾向にあります。「国譲り神話」がその典型例です。その土台の上に、『怨霊思想』が重なり、それ以来、日本人は、敗者に優しくなったとのこと。なんとなく理解できますね。



(M.S.)